

I ラジオを聞く

幼稚園児の頃、ダンスの上にあったラジオを聞くのが楽しみでした。策略により無罪の罪をかぶせられて絶海の孤島にある刑務所に入れられ、脱獄して復讐をやり遂げる。巖窟王の物語をラジオにかじりつくように聞いていた覚えがあります。ラジオのスイッチを入れダイヤルを回すと扇のように青色が広がり、放送局に同調すると青目玉になる。これがマジックアイといわれる真空管だと知ったのは中学生になってからでした。

II ラジオに目覚める

第一回東京オリンピックの時、中学生でした。どこで知ったのか、かまぼこ板にコイルとバリコン、鉱石、抵抗で組み立てたたらクリスタルイヤホンから放送が聞こえてきたのです。秋葉原では色々な組み立てキットが販売されていて、なんとかお小遣いをせしめて5球スーパーの組み立てへとエスカレートして行きました。回路図も分らないけれど、なんとか組み立てて音が出たときには感動しました。クリスタルイヤホンと違い音が良いのにびっくりしました。この頃に中波ラジオ2局でステレオ放送実験が行なわれましたが、ステレオ放送と言われてもステレオがどの様なものか理解できませんでした。

III アマチュア無線にはまる

アマチュア無線がはやり初めて、トリオとか八重洲無線から完成品が出てきた頃です。(多分1965年頃) それまではアマチュア無線局を開局するには資格を取得し、受信機と送信機を自作しなければなりません。アマチュア無線で使用出来る無線方式はトンツーと言われる電信と音声のAMでしたが、SSB(シングルサイドバンド)という方式が普及し始めました。SSB方式とは電波の幅を半分にスライスして電波を軽くすることにより遠くまで届く可能性がある、日本国内ばかりでなく外国の人と直接話すことが出来るかも、そんな期待を持たせる方式です。業務用の送受信機も真空管の時代でした。

中学校でアマチュア無線クラブを発足させたかったのですが、中学生にアマチュア無線は時期不相応と言われ却下されてしまいました。裕福な友達は免許を取得して、無線機を購入してもらいアマチュア無線局を開局した人もいました。自分の方は経済事情が許すわけも無く、都営アパートの4階ではアンテナを張ることが出来ません。仕方なしにBCL(遠くの放送局を受信する趣味のこと)の為にベランダに電線を出して受信アンテナとし、夜間になるとラジオにかじりついていました。中波は電波の特性から夜間になると、日本各地の放送や時折海外放送が聞こえる事も有りました。放送局へ受信レポートを出すとQSLカード『コールサイン(JOAKがNHK東京)入りの絵はがきみたいなもの・・・』が発行されました。QSLカードを集めるべくあっちこちの放送局をワッチ(受信すること)していました

IV やっとレコードを聴ける機器を手に入れる

高校くらいの時、大橋巨泉と誰かがJAZZの解説をしていた番組を聞いた覚えがあります。JAZZ喫茶で

スピーカーの前でうなされるような感じで聴いている人を見て不思議に感じたものです。J A Z Z は分るまで聴く？

何度も聴いているとストンと分る時が来るそうです。J A Z Z 喫茶は高尚な音楽の J A Z Z を鑑賞する場なのでしょうか。現在聴いている J A Z Z 曲の多くが生まれていた時代なのに、同時代で J A Z Z を聴く事は有りませんでした。

社会人になった頃、大阪国際見本市が開催されていました。FM ステレオ放送が本格的に開始され、FM fan とか FM レコパルとかの週刊誌を読んでいました。長岡鉄男氏の記事はダントツにインパクトがあり、バックロードホーンタイプとかスワンタイプなどの S P ボックスを発表されていました。オーディオ機器は重い方が良い音がでるとか、良い音のレコードはこれだというようなものも発表していたと思います。

記事に触発されてナショナル、パイオニア、フォステック、コーラル等々検討した結果、ダイヤトーンの P - 610 で制作することにしました。安価なのと音がよさそうに思えたのです。箱に入れ音が出てきたときには、それだけで興奮したものです。次は低域とダイナミックを求めて P - 610 をダブルにしてスピーカーを頑丈に取り付けてみたりして、音の変化を楽しんでいました。次にその箱を利用してオンキョウの 30 cm ウーハーと R C A のホーンを上に乗せて 2 ウエイを組んでみたりしましたが、この辺までが限界でした。それまで自作真空管アンプ + C E C のターンテーブルでなんとか音を出していましたが、自作を続けるには回路知識も足りないこと、資金が続かないこと、作業エリアの確保も出来ない、測定器も無い、半田ゴテとテスターだけでのないないづくしではまともなアンプは制作出来ないと諦め、思い切って S P や真空管などの部品もすべて手放しました。

無くなると寂しいもので、ソニーのプリメインとデノンのレコードプレーヤー、FM チューナを購入しました。スピーカーは確かフィリップスのフルレンジユニットを箱に入れたものでした。レコードは高くて安易に購入出来なかったのも、数枚程度という寂しい状況でした。聞くのはもっぱら F M 放送で、後にタイマーとオープンデッキを購入して留守録にトライしていました。L P レンタル店も行った覚えがあります。

V オーディオ的思考が役に立った

私は病院電気設備（強電屋で）の保全・管理の業務に携わって参りました。病院もアナログから電子時代への移行時期で、自動検査機器の登場、C T、M R I、内視鏡や腎破碎などの検査・治療機器の導入、電子カルテの導入など、次々押し寄せてきました。その様な中、いくつかのトラブルをオーディオ的思考で乗り切ることが出来ました。

心電図や脳波はちょうどカートリッジの出力信号と同じ程度（数 m V）で、検査室はシールドしないと安定した測定結果が得られないこともありました。センサーからの信号線にシールド網を通すなどの対応をしました。脳波検査で時々雑音が入ると言われて調査したところ、測定用ベッド横にコンセントがありました。測定用ベッドが金属製で、ベッドや患者さんがコンセントに近づくと雑音を拾う事が分かりました。コンセントプレートも金属製にしてベッドにアースをつけることで雑音の低減を図ることが出来ました。

当時、検査機器は R S - 232 C 規格で、定格では接続距離 2 ~ 3 m 以内となっていました。病院の検査室で電算機を導入した病院は少なかった様です。検査機器から電算機までは 10 m 超離れていました。電算機がフリーズする現象が多発し、患者さんへの影響も生じました。多分信号線に課題があると推測して、信号線にハイグレード製品を用いればうまく行くのではないかと考えました。一般品とハイグレード製品は材質やとシールドなどの構造からして明らかに違います。信号線をハイグレード品に交換し、なんとか

安定的に信号が受けられるようになりました。(補足：当時、今のネットワークは存在していません。)

同じ電気分野ではあるものの自分の職域を超えており、みんなが手探り状態の時期でしたのでトライできたと思います。成功しなかったらと思うと今でも背筋が寒くなります。でもオーディオ的手法で課題を改善できたのです。よく考えてみると、発生した事象は電気の基本的法則に即していることばかりで、強電とか弱電とかに区分していたら成功しなかったと思っています。

VI やっとレコードを聴ける時間が来た

55才の時、定年退職前セミナーを受講しました。タイミングと感じて外資系会社に転職しました。それまでの当直勤務から開放され連続休暇が取得できるようになり、オーディオの虫がうごめいてきました。この頃リサイクル店には中古レコードが積み重なっていました。CDへの移行時期だったのでしょう。中でもクラシックレコードは安価で1枚10円なんて言うこともざらでした。同じ曲は購入しないという自己ルールだけで闇雲にクラシック盤を中心に集めていました。少しずつ枚数は増えましたが、実は知らない曲ばかりでした。同じ曲が何枚もあって不思議に思っていました。同じ曲でも演奏者が違っていたり、指揮者が異なっていたりしていました。クラシック曲は同じに聞こえるものだと勝手に思い込んでいたのです。お恥ずかしい限りです。



JAZZレコードが発売されてほぼ100年位だそうです。それにしてもJAZZはたくさん演奏者がいます。名盤だとか音が良いとかの基準で無くLPやCDは記録として考え、アーティストにどれだけ近づけるかということだと教わりました。JAZZの入門書にはこの曲もあの曲も聴くべきと書いてあり、出来ないことを脅迫されているような感覚になってしまいます。自分の好みの曲を探す、そんな聴き方でも良いと思っています。

VII ざっくりとしたレコードの歴史

ふとLP誕生までの経過をなぞってみたいと思いました。1877年にエジソンがシリンダー形状ものに人間の声を録音・再生出来る機械を発明しました。その機械は“フォノグラム”と名付けられ、商品化されましたが録音時間は1分程度でした。改良競争は続いてゆきます。

スミソニアン博物館でフォノトグラフを見て着想を得たベルリーナが円盤方式のレコードを用いる“グラムフォン”を発明し、1887年に特許が出願されます。フォノグラムのシリンダー式とグラムフォンの円盤式の競争開始です。1890年頃には音楽を聴くのが主流になってきたそうです。次第に円盤方式が優勢となります。(注：フォノトグラフは蓄音機に似た形状で、音を記録する機械。音を録音するまでにはなっていない。)

1925年にWE(ウエスタン・エレクトリック)が電気録音機器をレコード会社に売り込みを始めます。機械式録音より音がよく、録音できる音楽の種類が多くなりました。

日本も昭和に入るとレコードが制作されています。あらえびす(野村胡堂)などは洋楽がいかに素晴らしいか、現代でも読まれているコラムを書いています。驚くことは、マーラーの交響曲第二番の11枚セットが100セット(輸入品)売れたとあらえびすは書いています。(1925年頃)西欧の交響的音楽の

セールスが西欧と比べても対人口比で最大だと言うレポートがあるそうです。さらに驚くべきはドイツで《未完成》の新譜が400組程度、日本において4000組売れたとあります。1931年頃で経済不況中の日本の出来事です。

LP盤の開発はされていましたが、1948年には商品として登場してきます。SPは4分程度だったのが78回転から33・1/3回転とし、音溝の幅を小さくして録音時間は22分、音域は30Hz～1万5000Hzとして登場してきたのです。ドーナツ盤の45回転派は録音時間の短さをオートチェンジャーで対応しますが、LPに決着がつきます。45回転のドーナツ盤（EP盤・45回転）は安価なのでポピュラー音楽やジュークボックスで採用されて行きます。ちなみに一般SP盤の特性は録音時間5分程度、45回転50Hz～6kHzだったそうです。（注：EP盤の穴が大きいのはオートチェンジャーのため）

録音現場では革命が起きていました。テープレコーダーの登場です。磁気テープ方式となり、音質もよく編集も可能です。最初は放送局で普及しますが、直ちにレコード会社でも採用され、それまでのダイレクト録音からテープレコーダー録音が主流となります。残念な事はこれら一連のオーディオ革命は戦争技術によりもたらされている現実があります。

映画やテープ業界ではステレオ化が先行していましたが、レコード業界で無駄な競争を避けるために45/45方式が策定され、1957年にはステレオLPが販売されます。発売当初ステレオを再生出来るカートリッジは市販されていなかったそうです。日本でも1959年までにはステレオでカッティング出来るようになります。まさにハイファイデリティ（高忠実）時代の到来となります。アンセルメはステレオ録音された音に対し《実際に音楽を聞くときの音の実体》と表現しています。今も知る巨匠たちが競うように録音しました。



レコードの売り上げが1940年代から右肩上がりに増えてゆきますが、録音技術の進歩とステレオ化が後押ししているようです。クラシック、ロック、JAZZやカントリー、ポップスや映画音楽等々、音楽と言えばレコードになってゆきます。スーパースターも登場し、曲によっては売り上げ100万枚を超えることも珍しく無くなりました。

VIII オーディオへのいくつかの懸念

私にとってオーディオの基本は演奏録音された音楽をどれだけ良い音で聴くことと思っています。LPは自分の生きてきた時間と平行しているので、LPへの愛着が湧きます。オーディオへのアプローチは様々で一概ではありません。アナログからデジタル時代になって、ますます様々なオーディオのアプローチが可能となっています。音声のデジタル化は最初電話から始まり、音楽がデジタルデータとなることでネット配信が主流になりつつあります。カセットウォークマン（アナログ）や iPod（デジタル）はつい最近の事です。

LPを聞くようになってからもカセットテープ、オープンテープ、MD、DVD、DAT、CDなど色々なオーディオ機器が登場してきました。これらの媒体に心動かされた時もありましたが、LPとCDだけが手元に残っています。レコード生産が終わってから、レコードブームとなっています。どうもこのブームは日本だけでは無いようです。最近読んだ月刊誌で《レコードをかけスピーカーが奏でる音が心と体を整るとまで表現されて

います。》《レコードをかけることが一種の精神安定剤、ぼけ防止》と書かれていました。《デジタルの音は体に良くない》とも書かれていました。このような表現に一種の危うさを感じるのは間違いでしょうか。

オーディオ製品は白物家電とは立ち位置が異なっていて、ヴィンテージ品でも現役で作動しているものがたくさんあります。一方ハイエンドと称される金額を見ると、本当に購入される方がいるのか摩訶不思議に感じます。オーディオ誌では評論家と称する人が新製品の販売員になっているの様な記事を見かけます。時に高額オーディオでなければオーディオでは無いと言っているかのようしか読めないことがあります。さらに困ったことは理論的に説明すべき所を誤った表現をしていることが多すぎます。趣味の世界だから少々間違った表現をしても、人に害を加えるので無ければ良いと言えるのでしょうか。

IX 終わりに

ちょうど『指揮者は何を考えているのか』（著者ジョン・マウチェリ・・・指揮者）を読んでいた。よくある指揮者の自伝でも無く、指揮者の歴史や指揮法でもなく、様々な観点から指揮者に関する事が語られています。中に「録音対生演奏（対ライブ演奏）」という章があり、録音された音楽とライブ音楽は違っていると明確に述べています。録音ではどうしても表現できない部分が有るとも言っています。そう、J A Z Zにおいてもソニー・ロリンズ（J A Z Zサクソフォン奏者）が音楽家にとってレコーディングがすべてではないと語っていたそうです。（岩浪洋三氏の本の中で・・・元スイングジャーナル編集長）

私はほとんど録音された音楽を聴いています。音楽の感動は物理的ファクターだけで決まるのではないと密かに信じています。でも、良い音で聞けるならより良い音で聞きたいと熱望しています。確かに録音された音楽は物理特性では自然のダイナミックレンジよりも狭いですし、クラシックで例えれば交響曲も弦楽四重奏もソナタも同じ音量で聞こえてしまいます。音楽には解明されていないファクターがまだまだありオーディオの課題はさらに増えています。なぜ音楽は人の心を揺さぶるのか、不思議さはますます増えるばかりです。

私の場合、レコードが有ったおかげで、リサイクル店にあったおかげで、色々な音楽に巡り会うことが出来ました。後追いで知識を仕入れているつもりなのですが追いつきません。でも案外面白いと感じています。レコードの良いところはかつての名演奏を今聴けることにあります。懐かしさを求めているのでもありませんし、ましてや後戻りしているつもりもありません。今の私はレコードを聴き、CDを聴く事が楽しみとなっています。レコードブームと言いますが、私自身はずっと以前から袋からレコードを取り出し、盤面を磨いてレコードに針を乗せています。幼少の頃感じた、レコードの溝に音楽が入っていることが不思議と感じる気持ちは変わっていないのです。時には中古レコードを探りに行ったり、相変わらず少ないお小遣いを握りしめて、相変わらず進歩していない私がいます。

